

# 海外におけるグローバル文化シンボルとしての鯉のぼり活動の進展

Progress of Koinobori Activities as a Global Cultural Symbol in Overseas

中 村 哲 \*

## Abstract

In this paper, the significance and the progress of "Koinobori Activity" in France, America and China were considered by teaching practice of the instructional materials "From Koinobori in Japan to Koinobori in the world". "Koinobori Activity" as a traditional Japanese culture is also related to the activities of future from the past to the present. This Activity has a role as a global cultural symbol that produce many bonds of domestic and foreign people. It is required to promote the development of instructional materials to create some of Japanese culture as a global culture symbol.

キーワード：鯉のぼり、グローバル文化シンボル、教材・教具

## 1 はじめに

本論文は、2013年度大学共同研究「外国における日本の『伝統と文化』に関する教育の調査研究」、2014年度大学共同研究「グローバル世界における日本文化教育に関する研究」、2015年度大学共同研究「グローバル世界における日本文化に関する教材研究」の継続的研究の内容である。そして、これまでの発表論文である『『日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ』の単元開発<sup>1)</sup>と「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり教材の構成」<sup>2)</sup>の研究内容と関連する。特に、2013年度と2014年度に海外において実施してきた日本文化に関する開発単元「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の授業実践をきっかけに海外における「鯉のぼり」活動が進展している状況と意義を国際交流の観点から考察する。

この継続的研究は、次のような教育動向と課題を踏まえている。周知のように戦後日本の教育方針を定めていた教育基本法が、これまでの教育の現状と21世紀の教育理念に基づいて2006年12月に改正された。そして、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」の教育目標が明記され、日本の学校教育において「伝統と文化」に関する教育の具体化が切実な課題となっている。このような教育動向において、「伝統と文化」を基盤とす

る日本人の育成という自国のアイデンティティ形成が強化されると偏狭な自国中心主義の教育に陥る。しかし、自国のアイデンティティ形成なしに国際社会への関与を図る教育は難しい。このジレンマの対応が、「伝統と文化」に関する教育の課題である。

この課題に対して、筆者は戦後の日本社会の変化と世界の国々の国際化を背景に日本における「伝統と文化」に関する教育研究に取り組んできている。しかし、これまでの研究では国内における実践研究に重点をおいてきたので、国外における日本の「伝統と文化」に関する文化の理解と発信を図る実践研究も必要とされる。その為、本共同研究では国外における日本の「伝統と文化」に関する教育の研究を重視している。そして、2011年3月11日に発生した東日本大震災をきっかけに着目した「鯉のぼり」を教材として、日本の伝統行事としての「鯉のぼり」活動をグローバル文化シンボルとして世界の鯉のぼり活動へと文化創造を図る単元を開発した。さらに、開発した単元「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」(6時間)を国内外で活用するためにパワーポイントの教材として開発した。この開発教材を活用して、これまでにフランス、アメリカ、中国において次のような実施日と実施場所にて授業実践を実施してきたのである。

\* Tetsu NAKAMURA 教育学部教授

- 2013年11月18日 パリ市内のリセ・シャンドラ・フォンテーヌ高等学校  
 2013年11月19日 リール第1大学社会経済学部  
 2014年3月28日 ドレイク大学外国語学部（アメリカアイオワ州デイモン）  
 2014年9月17日 リヨン第3大学日本語科  
 2014年9月18日 リヨン高等師範学校  
 2015年3月9日 華南師範大学（広州市）  
 2015年3月11日 華東師範大学（上海市）  
 2015年3月12日 同済大学（上海市）上海理工大学（上海市）

これらの授業実践を国別に分け、フランス、アメリカ、中国における「鯉のぼり」活動の授業実践とその授業実践による各国における鯉のぼり活動の進展状況と活動意義を述べる。

## 2 フランスにおける鯉のぼり活動の進展

フランスにおける「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の教材については、2013年11月16日から25日の期間でフランスを訪問した。そして、パリ市のリセ・シャンドラ・フォンテーヌ中等学校（11月18日）とリール市のリール第1大学社会経済学部（11月19日）にて授業を実施した。リセ・シャンドラ・フォンテーヌ中等学校は、パリ16区にある中学校と高等学校を併設して、約1700名の生徒数を有する共学の公立校である。特に、日本語、中国語を含むアジア言語教育の中核的役割を担っている。日本語教育の教師と図書も配置されているので、在仏の多くの日本人生徒たちも通学している。この鯉のぼり授業を実施するに際して、同校のジェラルド・ブルー（Gerald Peloux）日本語担当の先生に協力を得て、中学3年生13名と中学4年生11名の混合クラスの生徒たちを対象にして午後3時過ぎから午後4時過ぎまで、パワーポイントで開発した「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の教材を活用して実施した。授業終了後に鯉のぼり作成の素材として「真っ白な鯉のぼり」と「メッセージを記載するカラーの鯉のぼり」を用意して、各生徒に鯉のぼり作成を宿題として指示した。その際、授業参加のほとんどの生徒たちが「真っ白な鯉のぼり」を選択したのである。その意味では、既製の鯉のぼりではなく、各自で作成するオリジナルな鯉のぼり作成を好むフランス人気質も感じられた。

なお、生徒たちの作成鯉のぼりは、2014年の初春にブルー先生から送付されてきた。また、送付されてきた生徒たちの鯉のぼりは、2014年5月5日に関学上ヶ原キャンパスにて実施した「第3回関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり一東北と世界へ羽ばたけ、私たちの願い—」の活動において掲揚された。

翌日の11月19日午前中にTGVでパリ北駅からリール・フランドル駅に移動し、リール第1大学社会経済学部のトゥチェ先生（Elisabeth Weinberg de Touchet）を訪問し、大学院の受講生9人を対象として「鯉のぼり」活動の授業を正午前から実施した。リール第1大学と本学は経済学部との交流を通して以前から教員と学生の交流は盛んになされてきたこともあり、受講生の学生には2012年度に関学へ留学した学生も参加していた。また、関学での「鯉のぼり」活動を紹介する写真に参加学生の知り合いの留学生も写っていたこともあり、日本とフランスの空間的状况を超えた学生たちの共有体験としての授業参加の様相が感じられた。なお、本授業にて活用された鯉のぼりについては、トゥチェ先生から担当の授業教材として活用したいとの要望によって寄贈したのである。

このような授業実践と共にパリにおいて「鯉のぼり」活動を実践されている次の活動組織に連携依頼をした。日仏文化センター（服部祐子館長）における2000年からユネスコと連携して「世界の子どもの日」を制定しようとする「KOINOBORI」活動<sup>3)</sup>と2011年の東日本大震災の被害地福島の子供たちを元気づけるサマーキャラバン活動（富樫一紀代表）の活動<sup>4)</sup>についての情報収集と活動協力の依頼をした。また、関学の同窓会パリ支部（奥澤和明支部長2013年）との協力を得て、支部関係者からも東日本大震災への応援メッセージの鯉のぼり作成の協力を得た。さらに、在フランス日本国大使館の田中義恭氏の協力を得て、1919年頃に当時の首相であったジョルジュ・クレマンソー（Georges Benjamin Clemenceau）がサン・ヴァンサン・シェル・ジュール（Saint-Vincent-sur-Jard）にある別荘に日本から送られた「鯉のぼり」を掲揚した写真資料のコピー提供を受けたのである。<sup>5)</sup>

2014年度のフランス訪問では、2013年度のフランスにおける「鯉のぼり」活動を推進するために大学共同研究「グローバル世界における日本文化教育に

関する研究」として、フランスと日本の文化交流のシンボルとしての「クレマンソーの鯉のぼり」に関する歴史調査とフランスにおける大学生に対する日本文化理解に関する開発教材の授業実践を目的として実施した。具体的には、1919年のパリ講話会議の際に在仏日本大使の松井慶四郎氏から首相のクレマンソーに送られた鯉のぼりの事実と背景の調査をクレマンソー記念館、ギメ東洋美術館、クレマンソー館等を訪問し、資料収集と聞き取り調査を行った。また、フランスのリヨン市のリヨン第3大学日本語学科（2014年9月17日）とリヨン高等師範学校（2014年9月18日）にて授業実践を実施した。リヨン第3大学と高等師範学校では、各大学での日本語受講の大学院生を対象として、「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼり」の開発教材を活用した授業を実践し、それらの授業内容の児童・生徒の理解を行動的反応手法によって調査を行った。これらの調査の内容と成果については、別の機会にて報告する予定である。

このような活動において「クレマンソーの鯉のぼり」に関する歴史調査については、次の成果を得た。<sup>6)</sup> 1919年に開催されたパリ講和条約会議に参加したフランス首相ジョルジュ・クレマンソーに日本の代表者である西園寺公望が鯉のぼりを贈呈したとの通説があった。当時の在仏日本大使の松井慶四郎の自叙伝では1920年1月に講話会議が始まる前にクレマンソーから「日本で男児の誕生に鯉幟を立てる習慣があるというが、ドーいうわけか」との問いかけがあり、その理由説明をしてから鯉のぼりと節句人形を贈呈することになった。松井大使は、日本の義兄に鯉幟大中小と5月人形の送付を依頼した。4月末にフランス大使館で日本からの鯉のぼりと人形を受け取り、クレマンソーに贈呈することになった。贈呈をする際に、松井大使はローマでの第三回国際連盟理事会に出席しなければならないので、大使夫人が鯉のぼりと人形について説明をされた。5月26日にクレマンソーから松井大使夫人宛てに礼状が届いた。中形の鯉のぼりを別荘にて掲揚した。別荘の鯉のぼりは現存し、現在、修復中である。実物調査は不可能であったが、現存の鯉のぼりの写真資料を入手できた。クレマンソー館では鯉のぼりが現在も保存され、掲揚されている。大形と中形の鯉のぼりは、ギメ東洋美術館の前身であるエヌーリ美術館に保存されていた。

これらの調査内容と史料に基づいて日仏の文化交流としての意義を理解できる教材開発の具体化ができるところに成果がある。さらに、これまでの開発教材である「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼり」の授業を実践することにより、開発教材の効果が明確にされたことは、今後の日本文化教育の教材がグローバル世界で活用できる手がかりになる。さらに、鯉のぼりも含めて他の日本文化教材開発を推進する授業モデルとしても意義がある。

### 3 アメリカにおける鯉のぼり活動の進展

アメリカ訪問については、2014年3月21日から3月31日の日程で、アメリカにおける小学校・大学の児童・生徒たちの日本文化に関する意識調査と日本文化に関する教育内容と教育方法の調査を目的として実施した。具体的には、日本文化に関する「鯉のぼり」の開発授業を実践し、その授業内容の児童・生徒の理解を行動的反応手法によって調査を行った。この調査を遂行するために、インディアナ大学教育学部では Keith C. Barton 教授と Patricia K. Kubow 教授、東アジア言語文化学科では Richard Rubinger 教授と Kevin Tsai 准教授、ドレイク大学では日本語教育担当佐澤准教授の支援協力を得た。

インディアナ大学教育学部では Keith C. Barton 教授と Patricia K. Kubow 教授を含めた大学院生10名と日本の社会と文化についての演習授業を実施した。また、東アジア言語文化学科の Richard Rubinger 教授と Kevin Tsai 准教授からは、「鯉のぼり」についての開発教材の授業内容と英語表現についての指導を受けた。さらに、ユニバーシティー幼稚園と小学校では文化学習の一環として実施されていた日本の鯉のぼり制作と作品展示の活動を見学した。このようにインディアナ大学関係の訪問においては日本文化の理解と多文化交流の活動を図るための連携がなされたところに意義がある。

ドレイク大学では、日本語教育担当の佐澤先生の支援により、ドレイク大学の学部学生とデモイン市内の小学校の児童を対象として授業実践を行った。また、市内の小学校では国際交流基金から派遣されている日本文化紹介コーディネータと日本交流センターの事務局長とも日本文化紹介についての意見交換を行った。特に、ドレイク大学での授業を通して日本語を学習している学部学生が日本語クラブの活

動として日本文化と鯉のぼりに関する教材を開発した。そして市内の学校にて日本文化紹介の授業を行うという大学内での学習だけでなく地域における児童・生徒たちに日本文化理解を図る教育活動へ進展したことは、地域での日本文化紹介と文化交流を実践する可能性を示したものとして意義がある。

このような活動において活用された日本語クラブと日本文化の紹介を意図した教材は次のような内容と構成になっている。教材はパワーポイントで作成されて、全ページ19枚からなっている。<sup>7)</sup>

最初の No.1 から No.4 までは、最初の題目に示されているよう「ドレイク大学 日本語クラブ」の活動内容と日本語授業内容が紹介されている。次の No.5 から No.15 までが鯉のぼりの紹介がなされている。さらに、No.16 から No.18 までは鯉のぼりが活用されている品物の紹介になっている。最後の No.19 は終わりのページになっている。

### ・ドレイク大学日本語クラブの紹介



No. 1 ドレイク大学 日本語クラブ



No. 2 ドレイク大学日本語クラブ

活動内容、活動参加者、活動場所、活動、日時などの紹介



No. 3 日本語クラブの具体的な活動内容

書道、カラオケ、弁当作り、すしづくり、お菓子賞味、折り紙、茶道、伝統と現代のゲーム、日本人学生との交流



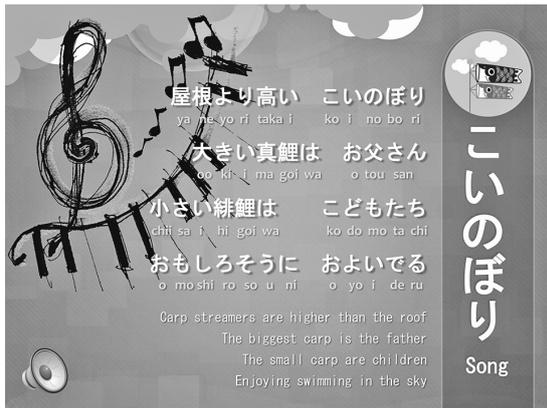
No. 4 日本語クラスの内容

日本語初級 日本語中級 会話と作文 日本語と日本文化 日本語と日本文学

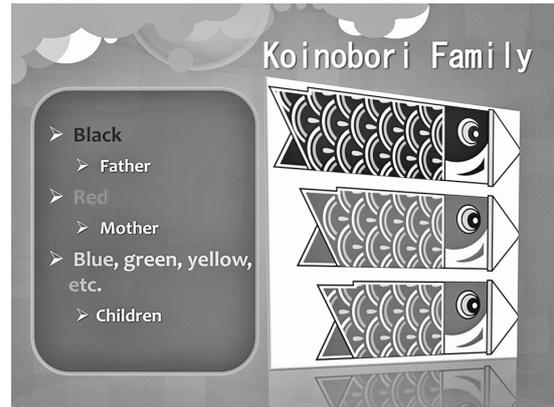
### ・鯉のぼりの紹介



No. 5 日本の鯉のぼり



No. 6 こいのぼりの歌詞  
日本語 ローマ字 英訳



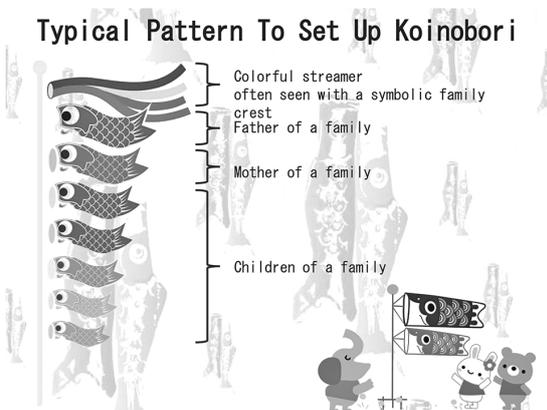
No. 9 鯉のぼりの色  
黒 色 お父さん  
赤 お母さん  
青 緑 黄色など 子供たち



No. 7 鯉のぼりの言語意味と紹介  
伝統行事 紙や布に鯉のぼりが描かれて作成される



No. 10 鯉のぼり行事  
5月5日 子供の日  
男子の子供たちとの祝いの傾向  
侍の鎧や兜の意味



No. 8 鯉のぼりの掲揚様式  
吹き流し お父さん お母さん 子供たち



No. 11 東京タワーでの鯉のぼり掲揚

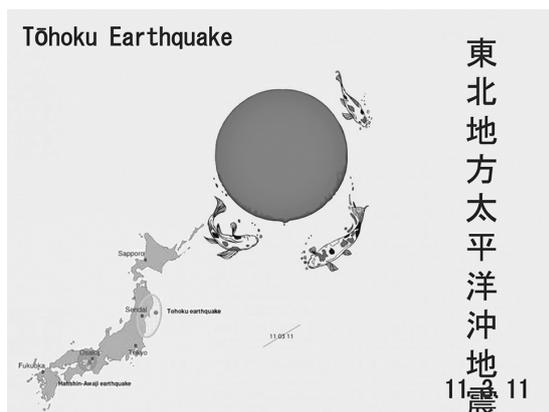


No. 12 鯉のぼりの意味

日本の伝統行事 鯉は決断、努力、活力、熱心のシンボル  
 鯉のぼりは中国の伝説に起源がある。鯉は滝を上って龍になった。いろいろな課題を克服して対応や能力を意味する。  
 日本では子供たちの幸福を願って鯉のぼりが始まった。



No. 15 鯉のぼりは世界中で作られている  
 ディズニーの鯉のぼり関連品物

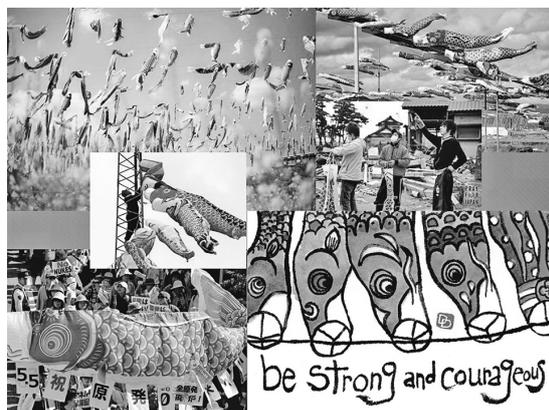


No. 13 東北地域の大震災

・鯉のぼり活用の品物紹介



No. 16 フランスでのマダムモーの鯉のぼり関連品物



No. 14 日本各地での鯉のぼり活動



No. 17 ナイキやリーボックなどの鯉のぼり関連製品



No. 18 他の有名な鯉のぼり関連品



No. 19 終了

このような開発教材に示されているようにドレイク大学の日本語受講の学生たちが私の授業内容を参考にして地域の小学生や高校生への日本文化を紹介する教材を開発した活動へと進展したのである。学生たちによる自主的活動が生み出されたことは、私の開発教材の活用による受講学生の日本文化理解に留まらず地域社会の児童生徒たちへの日本文化紹介という社会教育的活動へ主体的に進展させた意義が指摘できる。その意味では、これまでの国際交流や国際理解の活動を深化させていくために参考となる活動であると評価できる。今後、この学生たちの開発教材による地域社会における児童生徒たちの鯉のぼりに関する文化理解と開発教材の構成等の検討が必要とされる。さらに、学内においても「鯉のぼり」展示活動が2014年と2015年の5月に関学での「鯉のぼり」活動と連携して実施されたのである。資料1 (p. 128) を参照されたし。

#### 4 中国における鯉のぼり活動の進展

中国訪問については科学研究費「『伝統と文化』

教育に関する教師教育カリキュラムの開発」の研究として華南師範大学、中山大學、華東師範大学、同濟大学、上海理工大学を訪問し各大学における「日本語・日本文化」教育のカリキュラム、授業実践、研究活動の調査を目的として実施したのである。2015年3月9日11:00から華南師範大学外国語文化学院日本語・日本文化の主任李雁南教授を含めて5名の教員と面会し、昼食を介して日本語・日本文化教育のカリキュラムと講義についての状況調査を実施した。14:00から日本語専攻の3年学部生約60名を対象にして、「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の開発教材の活用授業を実施すると共に受講生日本文化理解の質問調査を行った。3月10日9:30からは、中山大學を訪問し、外国语学院李榮准教授に面会し、日本文化教育のカリキュラムと講義についての状況調査を実施した。午後、広州から上海へ移動した。なお、夕方には関学同窓会上海支部(烏澤克博支部長)の方々ともお会いし、鯉のぼり活動への協力依頼を行った。<sup>8)</sup>

3月11日11:00から華東師範大学外語学院日語系を訪問し、日本語担当の宇野雄二教員に面会し、日本文化教育のカリキュラムと講義についての状況調査を実施した。また、13:30から潘世聖教授と面会し、日本語専攻の3年学部生約40名を対象にして、「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の開発教材の活用授業を実施すると共に日本文化理解の質問調査を行った。その後、潘世聖教授を含めた5名の教員と日本文化教育の現状と課題等について意見交換を実施した。

3月12日9:30から同濟大学外国語学院日語系主任劉曉芳准教授に面会し、日本文化教育のカリキュラムと講義についての状況調査を実施した。10:00から魏准教授担当の日本語授業において3年生約20名を対象にして、「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の開発教材の授業を実施すると共に日本文化理解の質問調査を行った。その後、劉曉芳准教授を含めた5名の教員と日本文化教育の現状と課題等について意見交換を実施した。13:00に上海理工大学外語学院杜勤教授に面会し、13:30から日本語専攻の1年学部生約20名を対象にして、「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の開発教材の授業を実施すると共に日本文化理解の質問調査を行った。その後、杜勤教授を含めた2名の教員と日本文化教育の現状と課題等について意見交換を実施した。

このように中国の各大学訪問の活動内容は、各大学における「日本語・日本文化」に関する教育カリキュラムと授業についての調査と開発教材「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の活用による受講生の日本文化に関する意識調査にある。本小論では後者の鯉のぼり活動に関する活動内容を紹介する。中山大學では時間的都合で授業が実践できなかったのであるが、他の四大学での「鯉のぼり」に関する授業は、基本的に次の展開に基づいて実施した。

①「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の開発教材自体が、1「鯉のぼり」活動の経緯、2「鯉のぼり」活動の内容、3「鯉のぼり」活動の意義の内容に基づいて構成されているので、これらの教材を活用した教授活動。②この教材に基づいて理解された鯉のぼり活動の趣旨を踏まえた「鯉のぼり」作成活動。③鯉のぼり活動と日本文化に関する質問表に回答する。

資料2 (p.128)として上海理工大学での講義と交流の写真と概要を掲載しているので、参照されたし。なお、中国での「鯉のぼり」授業では他国での授業実践と比べた場合に、受講生の質問表の内容が多く、多くの学生が日本語で記載していること、受講生の回答内容が資料として確保されているので、これらの回答内容から受講生の授業と日本文化に関する意識が理解できるところに意義がある。

「日本文化に関する質問調査」の問いは次の4つである。

- 問1 あなたの「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の講義内容に関する感想を記載して下さい。
- 問2 あなたが興味・関心を有している「日本文化」に関する具体内容を記載して下さい。
- 問3 あなたが考える「日本文化」と「中国文化」の相違性と共通性について記載して下さい。
- 問4 あなたの「日本文化」に関する感想を自由に記載して下さい。

各大学での質問表の回収数は次のようになっている。華南大学52部、華東大学38部、同濟大学16名、上海理工大20名。これらの質問表の中からもっとも回収数が多い華南大学の記載内容に焦点づけて検討する。

質問表の「問1 あなたの「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の講義内容に関する感想を記載

して下さい。」では、講義内容としてもっとも核になる「伝統行事としての鯉のぼり」から「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり」としての意味の理解がなされているかどうかの観点から検討する。理解内容としては、次の3内容に大別できる。①鯉のぼりが日本の伝統行事に関する内容(13名)。この具体的内容としては、「日本の庶民の伝統行事」「鯉のぼりの分類、行事、歴史」に関する記載である。特に、「端午の節句に掲揚する」「除災招福の願い」「登竜門との関係」などのように中国の文化と関連した内容がある。②鯉のぼりが日本の伝統行事から世界の文化シンボルに関する内容(33名)。この具体的内容としては、「文化シンボルとして、全世界に広まって、文化交流の力になる」「人々の活力を生みだし、日本の伝統的な文化を世界に交流と創造を生み出す」「日本の文化財だけでなく、世界の文化財とも言える」という世界の文化シンボルの役割に関する記載である。特に、「日本の鯉のぼりは地元の人たちを励ますだけでなく、鯉のぼりの活動を通して、世界各地の人と子供たちにも活気あふれて楽しく成長する願いを伝える」などのように世界の子供への関与も指摘した内容がある。③授業についての一般的感想に関する内容(6名)。この具体的内容としては、「講義内容はおもしろかった」「いろいろ勉強になりました」「鯉のぼりがほしい」など授業の感想と鯉のぼりの品物への関心に関する内容である。このような回答内容から受講生の60パーセントを超える学生が、「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり」としての意味理解をしていると判断できる。

質問表の「問2 あなたが興味・関心を有している「日本文化」に関する具体内容を記載して下さい。」では、日本文化について記載する領域や具体例の内容、さらに記載する数についても指示していないので、回答内容を列挙して関心が高い事項を列挙し、記載内容が多い例を指摘する。アニメ・マンガ(14名)、食文化(ラーメン、すしなども含む。12名)、武道(剣道も含む。6名)、茶道(6名)、華道(6名)、桜(5名)、歌舞伎(5名)着物(浴衣も含む。4名)、冠婚葬祭(3名)。その他の事項としては、小説、ことわざ、酒、和歌、俳句、女性の地位などが指摘できる。これらの内容については、アニメ・マンガや和食は、新聞・テレビ・インターネットなどのメディア関連情報においても同様

な傾向がある。さらに、武道、茶道、華道などのように精神的側面の日本文化も外国から興味関心を持たれる内容になっている。その意味では、このような傾向は中国だけでなく、世界の多くの国々においても同様な傾向であると判断できる。

質問表の「問3 あなたが考える「日本文化」と「中国文化」の相違性と共通性について記載して下さい。」では、共通性と相違性の指摘内容が抽象的な内容と具体的な内容に大別できる。共通性の内容としては、漢字の利用(10名)、和の精神(5名)、自然との調和(3名)、倫理礼儀の尊重(3名)、箸の利用(3名)、儒教の思想(2名)などの指摘が複数名から記載されていた。その他の指摘としては、農耕文化、集団主義、行事、保守的などが見られた。このように両国の文化の共通性としては、東洋文化としてよく西洋文化と対比して指摘される自然と人間の融合や人間同士の和の関係などと同じであると言える。その他の指摘も日本人としての行動や思想の特性であると理解できるものである。相違性の内容としては、日本文化については、繊細(8名)、曖昧性(3名)、柔軟性(3名)、海洋文化(2名)自然美(1名)などの指摘がある。中国文化については、包容性(3名)、多彩(2名)、人工美(1名)、大陸文化(2名)、巨大性(2名)などの指摘がある。このような相違性については、地形や領土の違いと国民の気質などに関係し、よく理解できる指摘であると言える。

質問紙の「問4 あなたの「日本文化」に関する感想を自由に記載して下さい。」では、日本文化の良さを指摘する内容と理解できない事項を指摘する内容に分かれる。日本文化についての良さに関しては、中国からの文化を独自の文化に創造している(10名)、伝統文化を継承し大切にしている(5名)、繊細(4名)豊か(3名)・魅力的(4名)・美しい(3名)・おもしろい(3名)・穏やか(3名)・神秘的(2名)などの特色が記載されている。さらに、理解できない内容として、曖昧性、切腹などの行為、若者の文化理解の乏しさなどが記載されている。

これらの質問に対する回答から開発授業と日本文化についての中国における受講学生の意識を理解する試みは、今後の日本文化に関する教材開発を推進する上で意義ある。さらに、華東師範大学と上海理工大学の受講学生たちは、4月下旬から5月上旬に各大学構内にてグローバル文化シンボルとしての鯉の

ぼり活動を、5月5日に上ヶ原キャンパスにて開催した「関学から舞い揚げよう空の翼!鯉のぼり」活動と連携する活動を実施した。資料3(p.128)と資料4(p.129)を参照されたし。その意味では、大学での授業内で留まるのではなく、大学内ではあるが社会的発展活動として進展した活動になったと言える。

## 5 おわりに

本小論では、2013年度と2014年度にフランス、アメリカ、中国において実施してきた日本文化に関する開発単元「日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ」の授業活動をきっかけに「鯉のぼり」活動が国際交流の観点から進展している活動状況とその活動意義を考察した。各国における「鯉のぼり」の授業実践を通して日本伝統文化としての「鯉のぼり」活動が、過去から現在へさらに未来の活動にも関連が図れ、国内外の人々の絆を生み出すグローバル文化シンボルとしての役割を生み出すものであると意義づけられる。今後も鯉のぼりを含めて日本文化をシンボルとして文化を創造する教材開発を推進することが求められる。

## 注

- 1) 拙稿「『日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ』の単元開発—グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり活動を意図して—」、関西学院大学『教育学論究』第5号 2013年12月 pp.95-105.
- 2) 拙稿「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり教材の構成」、関西学院大学『教育学論究』第6号 2014年12月 pp.111-121.
- 3) パリ日仏文化センターのホームページを参照されたし。<http://www.ccfj-paris.org/>
- 4) 富樫一紀主催のサマーキャラバン活動については、次のホームページを参照されたし。<http://www.merryproject.com/news/2015/01/3507/>
- 5) "CLEMENCEAU LE TIGER ET L'ASIE" Musee national des arts asiatique-Guime, Paris 2014 p.276.
- 6) 松井慶四郎『松井慶四郎自叙伝』刊行社 昭和58年6月20日 pp.107-108.
- 7) この教材は、ドレイク大学の日本語教育クラブに所属している Alicia Pei Wen Kang さんが、ドレイク大学での『日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ』講義聴取後に開発されたものである。
- 8) 関学上海支部の鯉のぼり活動については、関学同窓会「母校通信」No.136を参照されたし。



資料1 ドレイク大学での鯉のぼり展示



資料3 華東師範大学での鯉のぼり活動

### 中村哲教授の日本文化专题講座圆满举行

发布时间：2015-03-16 浏览次数：94

2015年3月12日（周四）下午，为加深日语系学生对日本文化的认识，日语系在外语社科楼306会议室举行了日本文化专题讲座。此次讲座的主讲人是日本关西学院大学教育学部、“全球日本文化教育研究中心”主任、“和文化教育学会”理事长中村哲教授。讲座由日语系主任杜勤教授主持，日语系部分老师携日语系学生参加了此次讲座。

中村教授的讲座主题为《从日本的鲤鱼旗到世界的鲤鱼旗》。讲座回顾了鲤鱼旗作为日本传统文化重要载体的发展过程，以及与中国古代文化的关联。详细介绍了其研究团队如何推动日本的鲤鱼旗走向世界的，以及日本的鲤鱼旗在东日本大地震后，参与灾后重建等活动的成功事例，阐述了日本传统文化在新时代背景下的活力。讲座结束后，中村教授还向上海理工大学外语学院赠送了鲤鱼旗实物，让日语系的学生们在鲤鱼旗上写上心愿，表达自己的美好祝愿。本次讲座进一步加深了学生们对日本文化的理解，激发了学生们学好日语、在今后的中日文化交流中如何更好地发挥作用的积极性。

翩翩起舞的鲤鱼旗，代表着中日两国人民间悠久的文化交流，也展现了日本人民的创造才能。充满热情的讲演，激发了在场每位师生的文化责任感。学生们在了解日本传统文化魅力的同时，感受到了日本民族对于自国文化的执着和深情。文化是一个民族的灵魂。这堂讲座，学生们感触良多，受益匪浅。



資料2 上海理工大学での講義と交流の様子

## “鲤鱼旗”活动圆满举行

2015年4月29日（周三）上午，为了促进中日文化交流，加深学生对日本传统文化的理解，日语系学生在上海理工大学日本文化中心举行挂了“鲤鱼旗”活动。此活动由日语系主办，日语系为主的师生们参与了此次活动。

在为期一个月的准备时间后，日语系学生在关西学院大学中村哲教授所赠的鲤鱼旗上写满了祝中日友好代代相传、世界和平、马到成功等美好的愿望与祝福。表达了同学们与冉冉挂起的鲤鱼旗一起跨越困难，实现梦想及对美好未来的憧憬。

“鲤鱼旗”活动，是在2011年3月11日东日本大地震发生后，与灾难和困境顽强抗争，寻求地域复兴的日本人民所发起的。在中村哲教授团队的宣传推动下，作为国际性教育交流活动走向世界、走入了中国的。本次活动加深了东方文明间的文化羁绊，对于激发传统文化在新时代新形势下的创造力具有一定的推动力，对于促进中日传统文化的进一步交流具有一定的借鉴意义。此外，从寓意上来说，漂洋过海而来的鲤鱼旗更象征着中日两国的友好关系世代相传，祈祷着世界永远和平的美丽愿望。

高高飘扬的鲤鱼旗，是中日两国师生长久友谊的建立，更是中日文化和平交流发展的见证。通过本次活动，学生们进一步加深了对于日本传统文化的理解，更感受到了日本人民对于勇气与力量的执着、坚持，以及对于友好与和平的深切期待。



日语系：张文碧 吴昊提供

### 資料4 上海理工大学での鯉のぼり活動の様子